

授業概要

（英語の）文法は母語話者の（抽象的な意味での）こころ／脳に収められた知識である。生得的な面も含め無意識のうちに獲得したので母語話者にも中身は説明できない。英語を学習している日本人には相当複雑な文法に見える。しかし日本語も英語も同じ人間言語である。「多様性」の向こう側、もっと深いところで共通性（普遍性）があり、どんな原理があるか、をさぐる。

具体的には英語の省略現象（か断片）について書かれた最近の論文（集）・文献を読む。

授業計画

第1回	Jason Merchant (2004) Fragments and Ellipsis (1)
第2回	Jason Merchant (2004) Fragments and Ellipsis (2)
第3回	Jason Merchant (2004) Fragments and Ellipsis (3)
第4回	Merchant and Simpson (eds.) (2012) Sluicing: Cross-Linguistic Perspectives (1)
第5回	Merchant and Simpson (eds.) (2012) Sluicing: Cross-Linguistic Perspectives (2)
第6回	Merchant and Simpson (eds.) (2012) Sluicing: Cross-Linguistic Perspectives (3)
第7回	Merchant and Simpson (eds.) (2012) Sluicing: Cross-Linguistic Perspectives (4)
第8回	Merchant and Simpson (eds.) (2012) Sluicing: Cross-Linguistic Perspectives (5)
第9回	van Craenenbroeck and Lipták (2013) “What sluicing can do, what it can’t, and in which language.” (1)
第10回	van Craenenbroeck and Lipták (2013) “What sluicing can do, what it can’t, and in which language.” (2)
第11回	Robert J. Stainton (2006a) Words and Thoughts (1)
第12回	Robert J. Stainton (2006a) Words and Thoughts (2)
第13回	Robert J. Stainton (2006a) Words and Thoughts (3)
第14回	Robert J. Stainton (2006a) Words and Thoughts (4)
第15回	まとめ
第16回	筆記試験

到達目標

（英語）統語論（syntax）は語と語を組み合わせる文を作る仕組みの研究で、そこには有限の仕組みを用いて無限の文を生成する人間の言語の創造性が反映されているという文中心主義が強く反映されている。視点を逆にとって、1語発話を出発点とし、2語発話、多語発話と次第に複雑な文法が頭の中に作られていくプロセスがどうなっているかという習得の順序を考慮した観点から分析し直すとうなるか理解することを目指す。

履修上の注意

主として講義形式である。最新の論文や文献は翻訳がないので、英語の文献をそのまま読み正確に理解した上で議論につなげていくか、教員の方で解説する。ただし日本の英語学研究者や学生は恵まれていて、大修館の英語学体系や研究社の現代の英文法シリーズなど良質の参考書があるので各自参照してほしい。

予習・復習

配布された印刷教材を事前に読み、疑問点、問題点があれば次の授業の時に質問できることが望ましい。また、授業でとったノートや印刷教材をもういちど読み返し整理する形での復習を欠かさないことが望ましい。

評価方法

予習・復習の有無、随時行うまとめの提出などを授業態度として筆記による定期試験の結果と合わせて評価する。学期末試験 70%、提出物 15%、授業態度 15%

テキスト

印刷教材を使用する。参考文献は随時紹介する。とりあえず次の文献を挙げておく。

Masaru, Kajita (1967) A Generative-Transformational Study of Semi-Auxiliaries in Present-Day American English, PhD.Diss., Princeton University.